

口永良部島の火山活動解説資料（令和7年3月）

福岡管区气象台
地域火山監視・警報センター
鹿児島地方气象台

口永良部島では、火山活動は低下していますが、山体の浅いところを震源とする火山性地震がやや多い状態で経過しています。

GNSS 連続観測では、2023 年 11 月以降、山体の膨張を示す変動は認められません。

活火山であることから、新岳及び古岳の火口内では、火山灰等が噴出する可能性があります。また、新岳西側割れ目等の地熱域では、高温の噴気や火山ガス等に注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）の予報事項に変更ありません。

○ 活動概況

・地震や微動の発生状況（図 6-1②③、図 6-2③、図 7）

口永良部島では、古岳火口付近の浅いところを震源とする火山性地震は、やや多い状態が継続しています。新岳火口付近の浅いところを震源とする火山性地震は少ない状態で経過しました。

火山性地震の月回数は 212 回（2 月：156 回）と前月より増加しました。古岳火口付近の火山性地震は 210 回（2 月：154 回）、新岳火口付近の火山性地震は 2 回（2 月：2 回）でした。新岳西側山麓付近の火山性地震は観測されませんでした。振幅の大きな火山性地震は発生していません。

震源が求まった火山性地震は、古岳火口付近のごく浅いところに分布しました。

火山性微動は観測されませんでした。

・噴煙など表面現象の状況（図 2～5、図 6-1①、図 6-2①）

新岳では、白色の噴煙が最高で火口縁上 300m（2 月：200m）まで上がりました。古岳では、監視カメラで火口縁を越える噴煙は観測されませんでした（2 月：なし）。

5 日に海上自衛隊第 1 航空群の協力により実施した上空からの観測では、新岳の火口内の状況は雲のため確認できませんでした。前回の観測（2024 年 10 月 10 日）と比較して新岳の火口周辺、古岳の火口内及びその周辺に特段の変化はみられませんでした。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

次回の火山活動解説資料（令和7年4月分）は令和7年5月12日に発表する予定です。

資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/know/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学、東京大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所及び屋久島町のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図 50mメッシュ（標高）』及び『電子地形図（タイル）』を使用しています。

6日に山上で実施した現地調査では、古岳火口で複数の噴気地帯、及び同火口内とその周辺で地熱域を確認しました。地熱域の温度や分布は、前回の観測（2月26日）と比較して特段の変化はみられませんでした。2023年6月の活動活発化以前と比べて、地熱域の拡大した状態が継続しています。古岳火口内西側の噴気孔において噴気音を確認しました。

5日から7日にかけて山麓から実施した現地調査では、新岳火口西側割れ目付近の地熱域の状況に特段の変化は認められませんでした。古岳火口周辺においても地熱域が引き続き認められました。古岳火口からは、火口縁をわずかに越える白色の噴煙を確認しました。

・火山ガスの状況（図6-1④、図6-2②）

東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、1日あたり20トンと少ない状態で、検出限界を下回る日もみられます（2月：検出限界を下回る状態）。2024年8月以降は概ね少ない状態で経過しています。

6日に山上で実施した現地調査では、前回の観測（2月26日）と同様に古岳火口において二酸化硫黄や硫化水素の強い臭気が認められました。

・地殻変動の状況（図8、図9）

GNSS連続観測では、2023年11月以降、山体の膨張を示す変動は認められません。



図1 口永良部島 噴煙の状況（3月12日、本村西監視カメラ）

新岳では、白色の噴煙が最高で火口縁上 300m（2月：200m）まで上がりました。古岳では、監視カメラで火口縁を越える噴煙は観測されませんでした（2月：なし）。

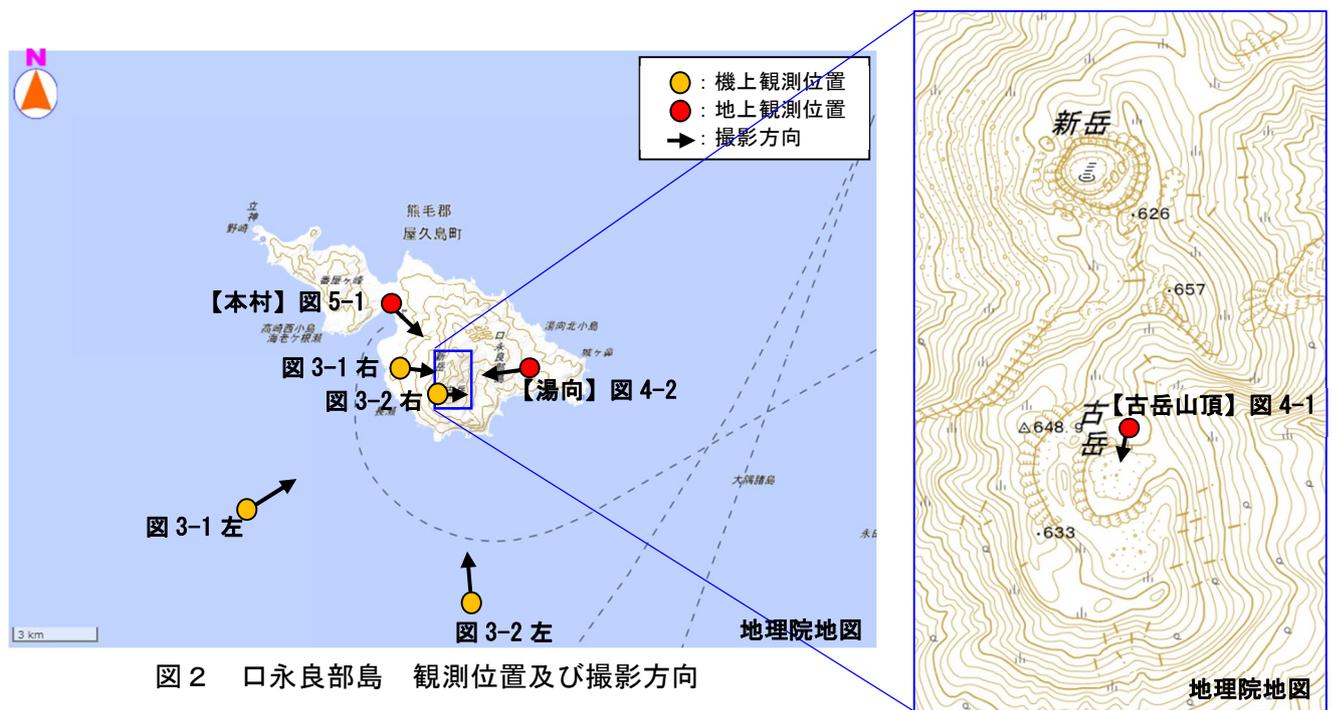


図2 口永良部島 観測位置及び撮影方向



図3-1 口永良部島 新岳火口周辺の状況

- ・これまでの観測と比較して、新岳火口西側割れ目付近（黄破線内）の状況に特段の変化は認められませんでした。
- ・新岳火口内の状況は雲のため確認できませんでした。



図3-2 口永良部島 古岳火口内及び周辺の状況

古岳火口では、火口内にとどまる程度の白色噴煙を確認しました。前回の観測と比較して、古岳火口内の噴煙の量に変化は認められませんでした。

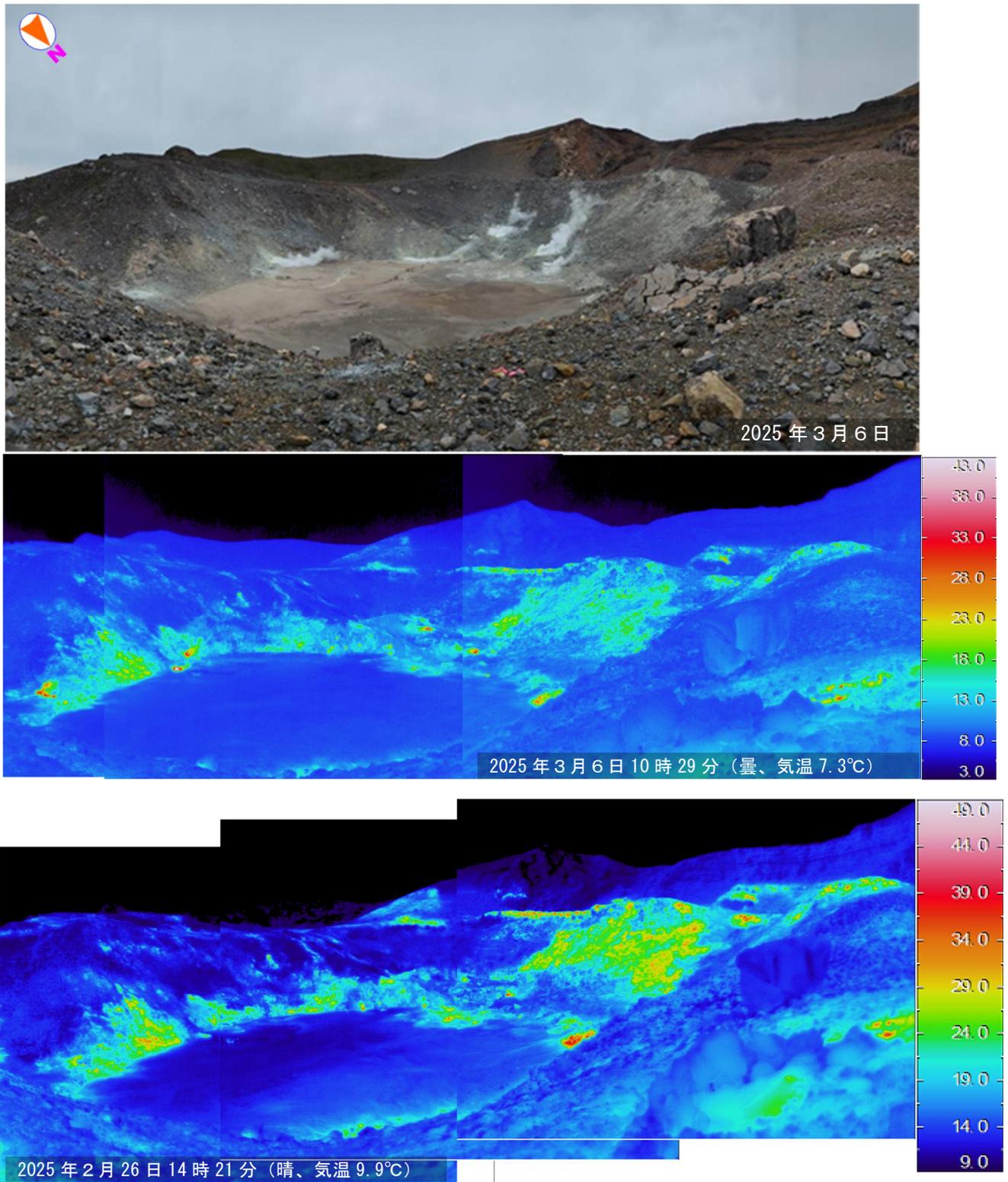


図4-1 口永良部島 古岳火口底周辺の状況（古岳火口内北側から撮影）

- ・6日に山上で実施した現地調査では、古岳火口で複数の噴気地帯、及び同火口内とその周辺で地熱域を確認しました。
- ・地熱域の温度や分布は前回の観測（2月26日）と比較して特段の変化はみられませんでした。2023年6月の活動活発化以前と比べて、地熱域の拡大した状態が継続しています。
- ・古岳火口内西側の噴気孔において噴気音を確認しました。
- ・古岳火口では二酸化硫黄や硫化水素の強い臭気が認められました。

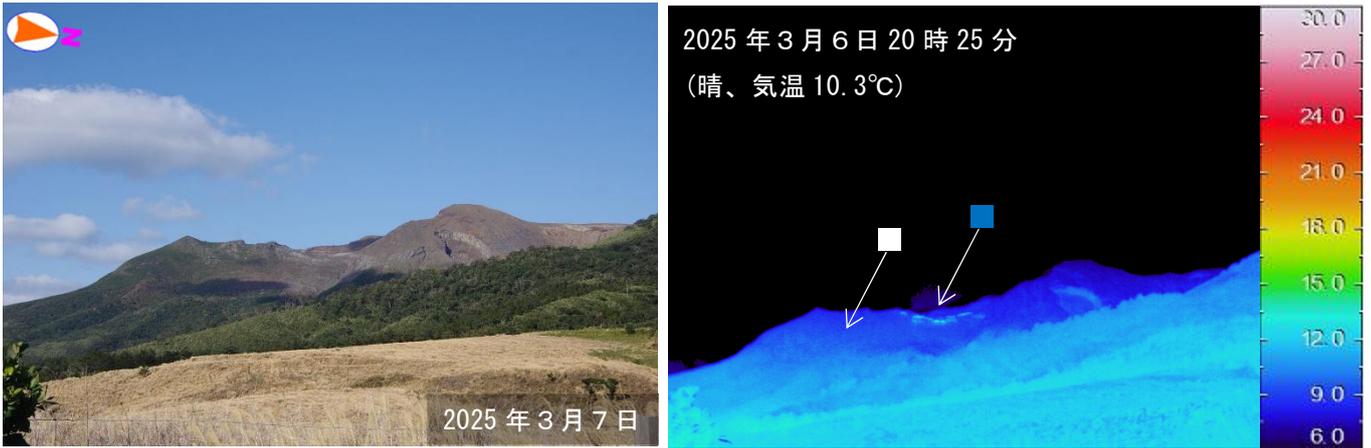


図 4-2 口永良部島 古岳周辺の地熱域の状況（湯向から観測）

5日から7日に山麓から実施した現地調査では、古岳火口付近で地熱域を引き続き観測しました。古岳火口からは、火口縁をわずかに越える白色の噴煙を確認しました。

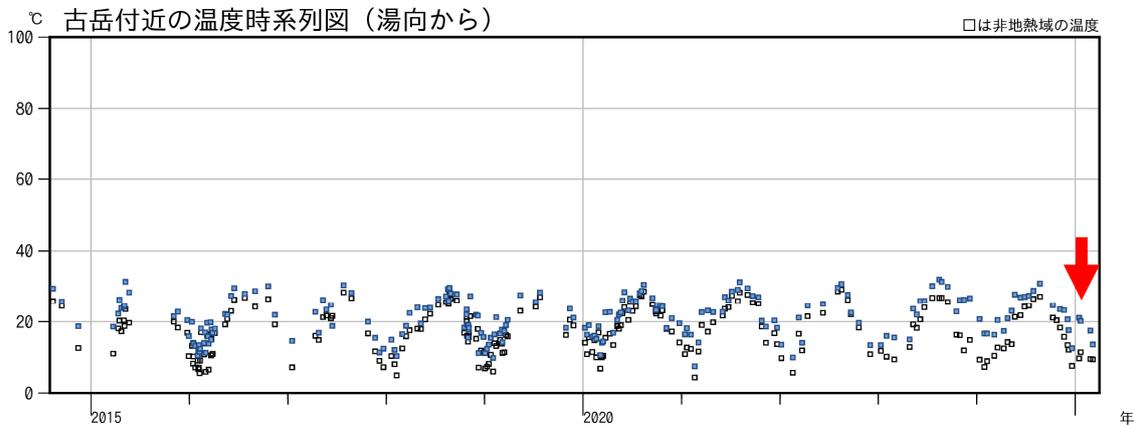


図 4-3 古岳火口付近の地熱域の温度時系列（2014年9月～2025年3月、湯向から観測）

赤外熱映像装置による観測では、古岳火口付近の地熱域の最高温度は2025年1月頃にわずかな上昇（赤矢印）が認められました。

各データは図 4-2 右上で示した領域の温度に対応しています。

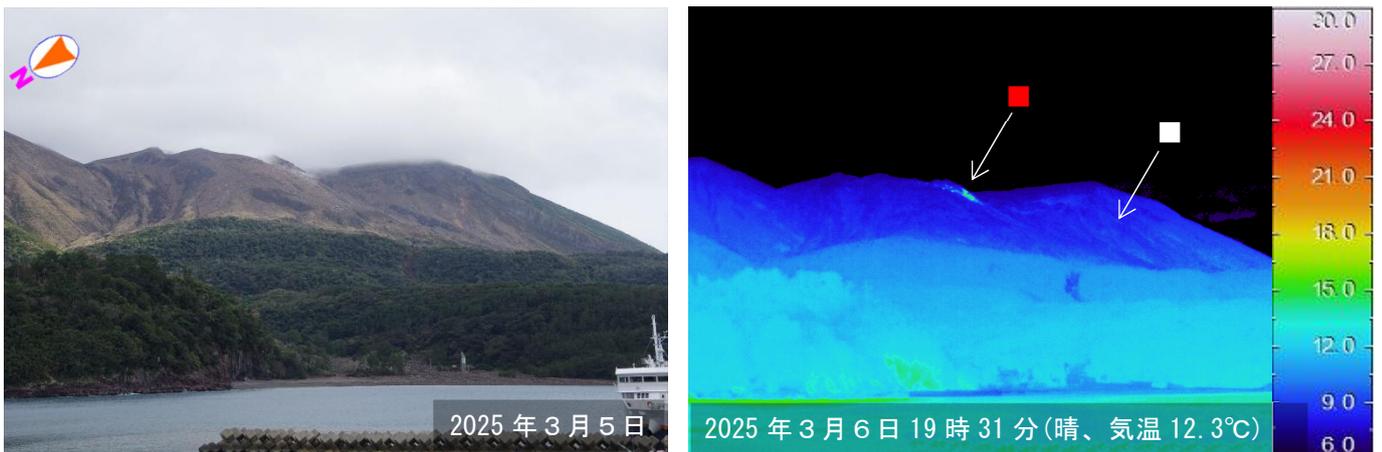


図 5-1 口永良部島 新岳火口及び新岳火口西側割れ目付近の状況（本村から観測）

5日から7日に山麓から実施した現地調査では、新岳火口西側割れ目付近で引き続き地熱域を観測しましたが、特段の変化はみられませんでした。

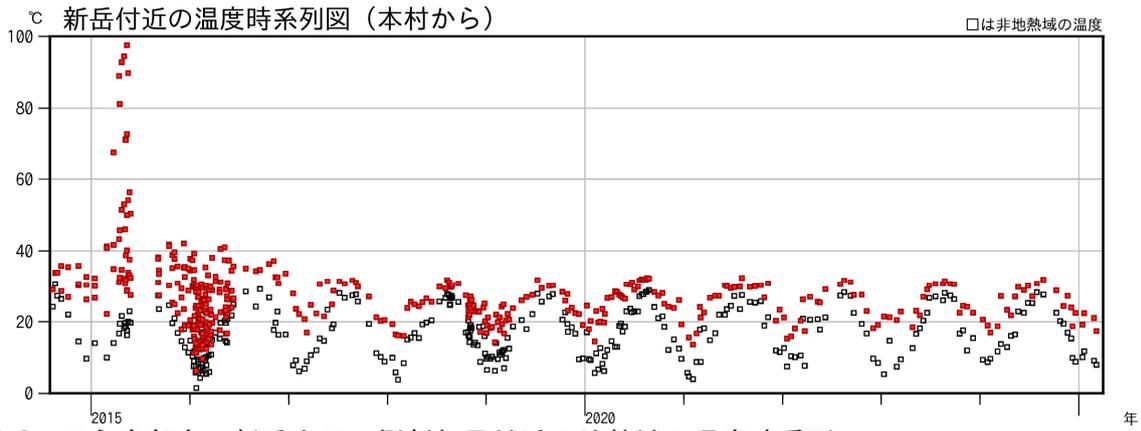


図 5-2 口永良部島 新岳火口西側割れ目付近の地熱域の温度時系列
(2014年9月～2025年3月、本村から観測)

赤外熱映像装置による観測では、新岳火口西側割れ目付近の地熱域の温度に特段の変化はありませんでした。

各データは図 5-1 右上で示した領域の温度に対応しています。

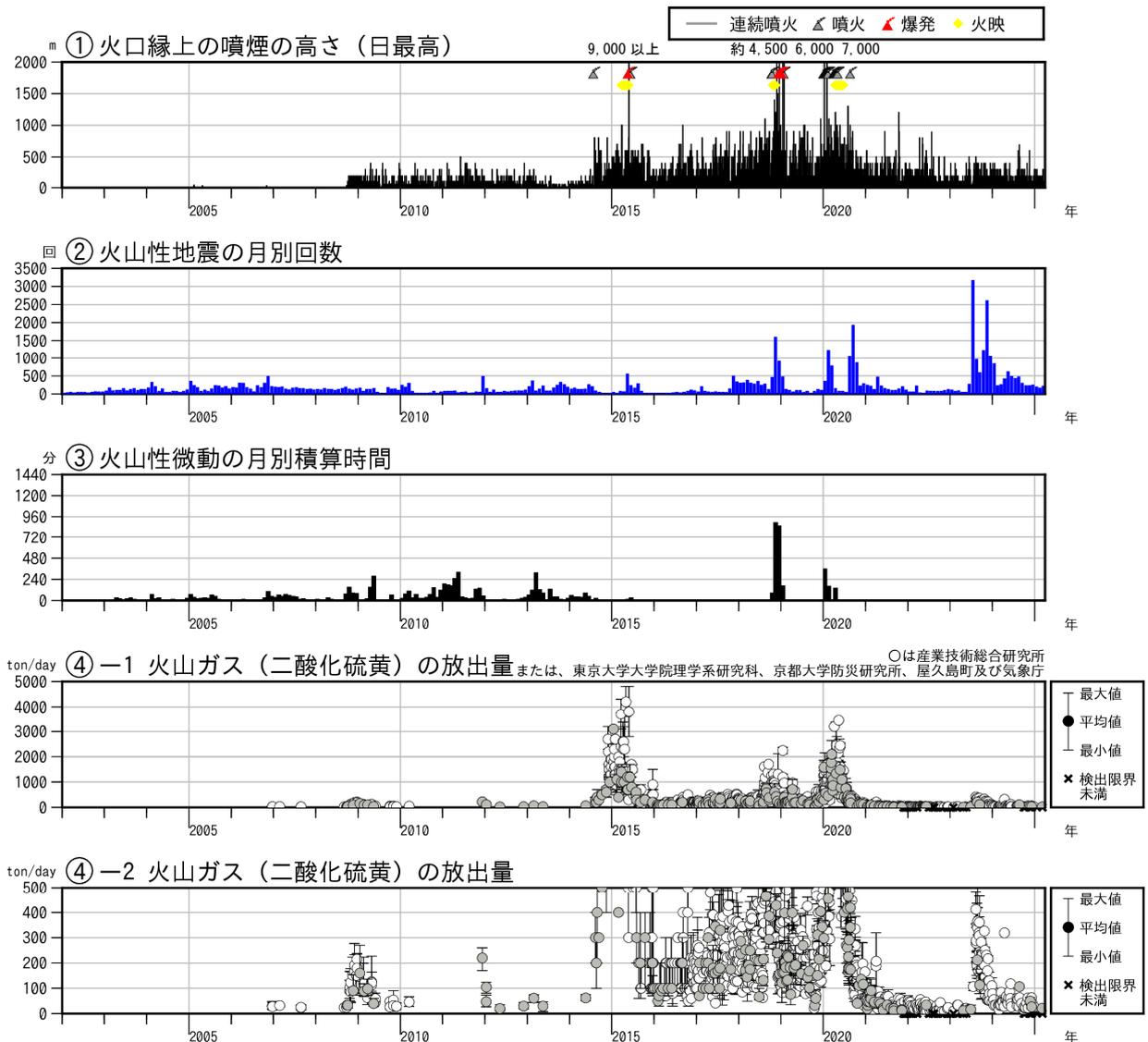


図 6-1 口永良部島 火山活動経過図（2002年1月～2025年3月）

火山性地震及び火山性微動は、観測点の稼働状況により、「野池山3（上下動 $8.0\mu\text{m/s}$ ）」「FDKL（京）（上下動 $6.0\mu\text{m/s}$ ）」「新岳西山麓（上下動 $3.0\mu\text{m/s}$ ）」「新岳北東山麓（上下動 $1.0\mu\text{m/s}$ ）」「古岳北（上下動 $6.0\mu\text{m/s}$ ）」「古岳南山麓（上下動 $4.0\mu\text{m/s}$ ）」のいずれかの基準を満たすものを計数しています。

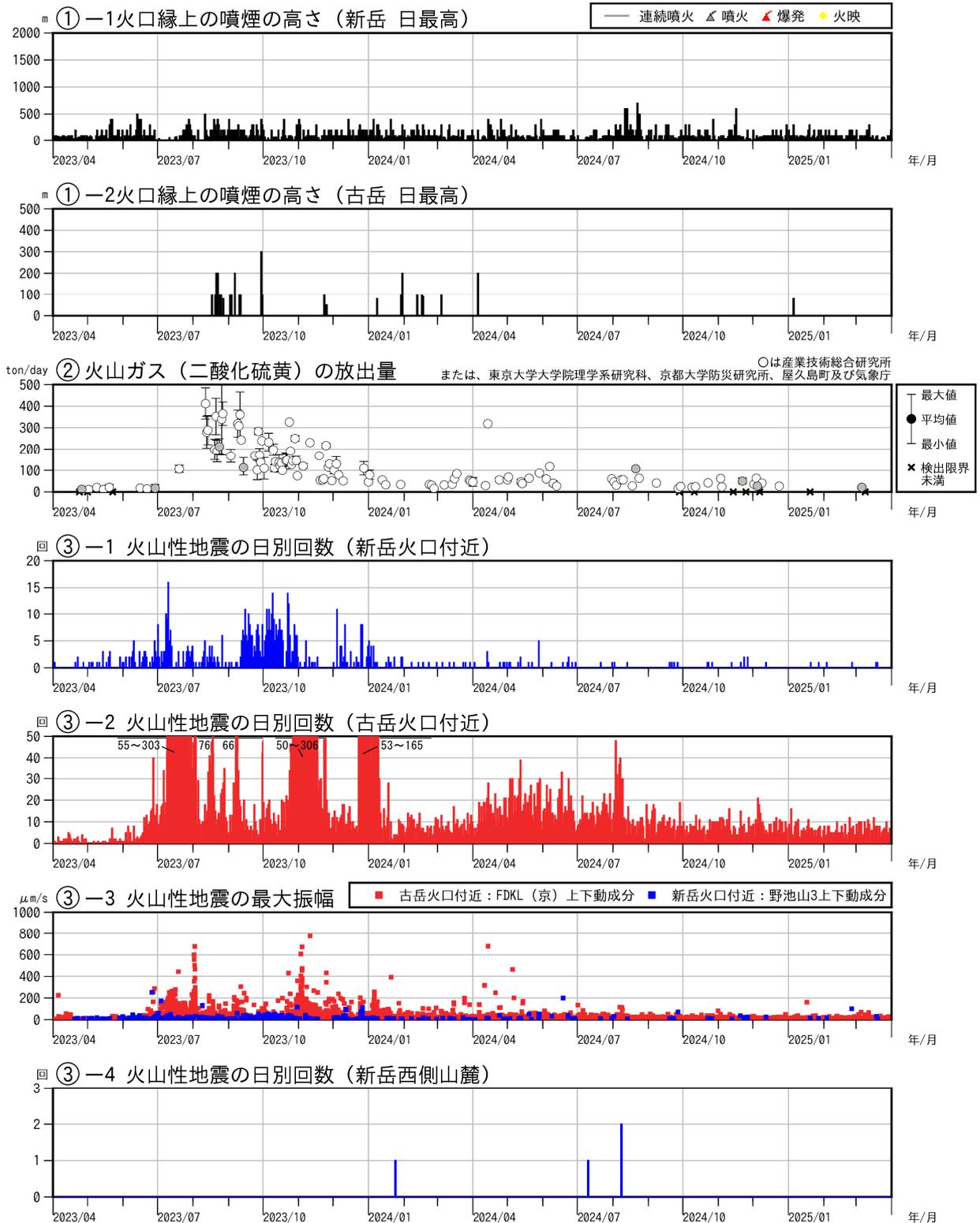


図 6-2 口永良部島 最近の火山活動経過図（2023年4月～2025年3月）

< 3月の状況 >

- ・新岳では、白色の噴煙が最高で火口縁上 300m（2月：200m）まで上がりました。古岳では、監視カメラで火口縁を越える噴煙は観測されませんでした（2月：なし）。
- ・火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、1日あたり 20 トンと少ない状態で、検出限界を下回る日もみられます（2月：検出限界を下回る状態）。2024年8月以降は概ね少ない状態で経過しています。
- ・火山性地震の月回数は 212 回（2月：156 回）と前月より増加しました。古岳火口付近の火山性地震は 210 回（2月：154 回）、新岳火口付近の火山性地震は 2 回（2月：2 回）でした。新岳西側山麓付近の火山性地震は観測されませんでした。振幅の大きな火山性地震は発生していません。

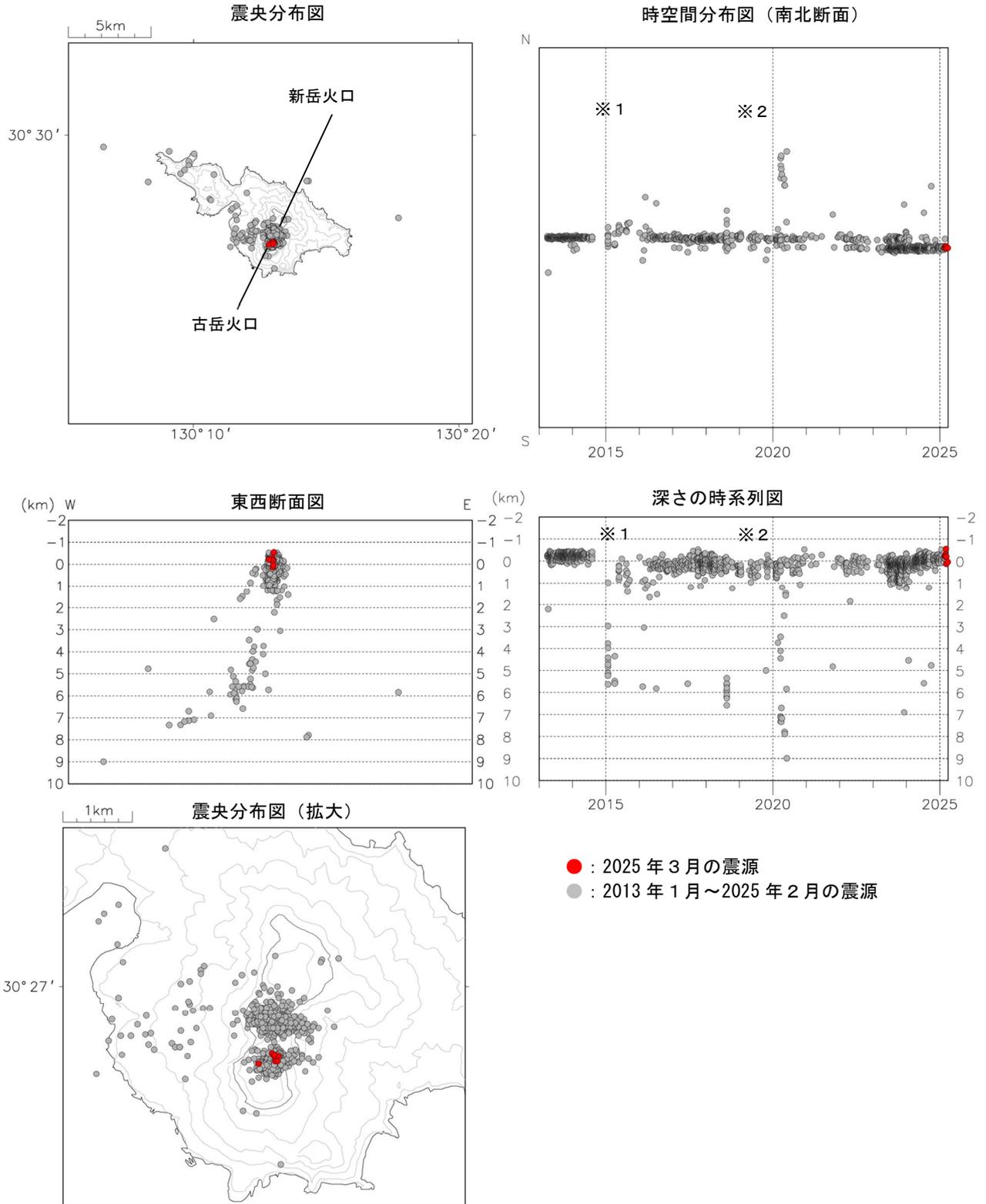


図7 口永良部島 震源分布図（2013年1月～2025年3月）

＜3月の状況＞

震源が求まった火山性地震は、古岳火口付近のごく浅いところに分布しました。

- ※1 2014年8月3日の噴火により、火口周辺の観測点が障害となったため、同噴火から2016年5月31日までは検知力や震源の精度が低下しています。
 - ※2 2019年1月17日の噴火により、火口周辺の観測点が障害となったため、同噴火から2019年10月8日までは検知力や震源の精度が低下しています。
- その他の期間においても観測点の障害等により、検知力や震源の精度が低下する場合があります。

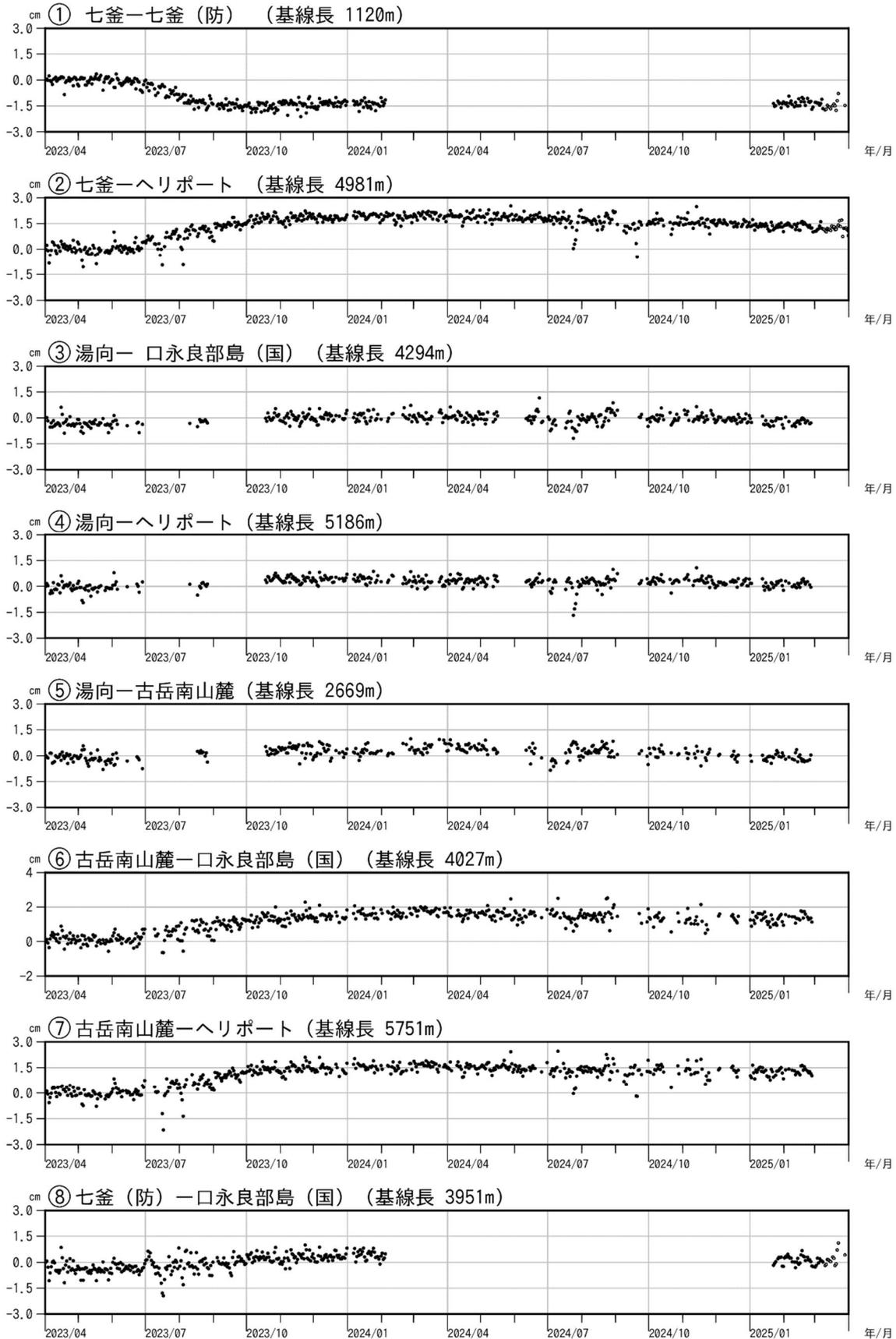


図 8-1 口永良部島 GNSS 連続観測による基線長変化（2023 年 4 月～2025 年 3 月）

GNSS 連続観測では、2023 年 11 月以降、山体の膨張を示す変動は認められません。

これらの基線は図 9 の①～⑧に対応しています。基線の空白部分は欠測を示しています。

2023 年 3 月 23 日の観測点修繕工事（七釜観測点）に伴うステップを補正しています。

（国）：国土地理院、（防）：防災科学技術研究所

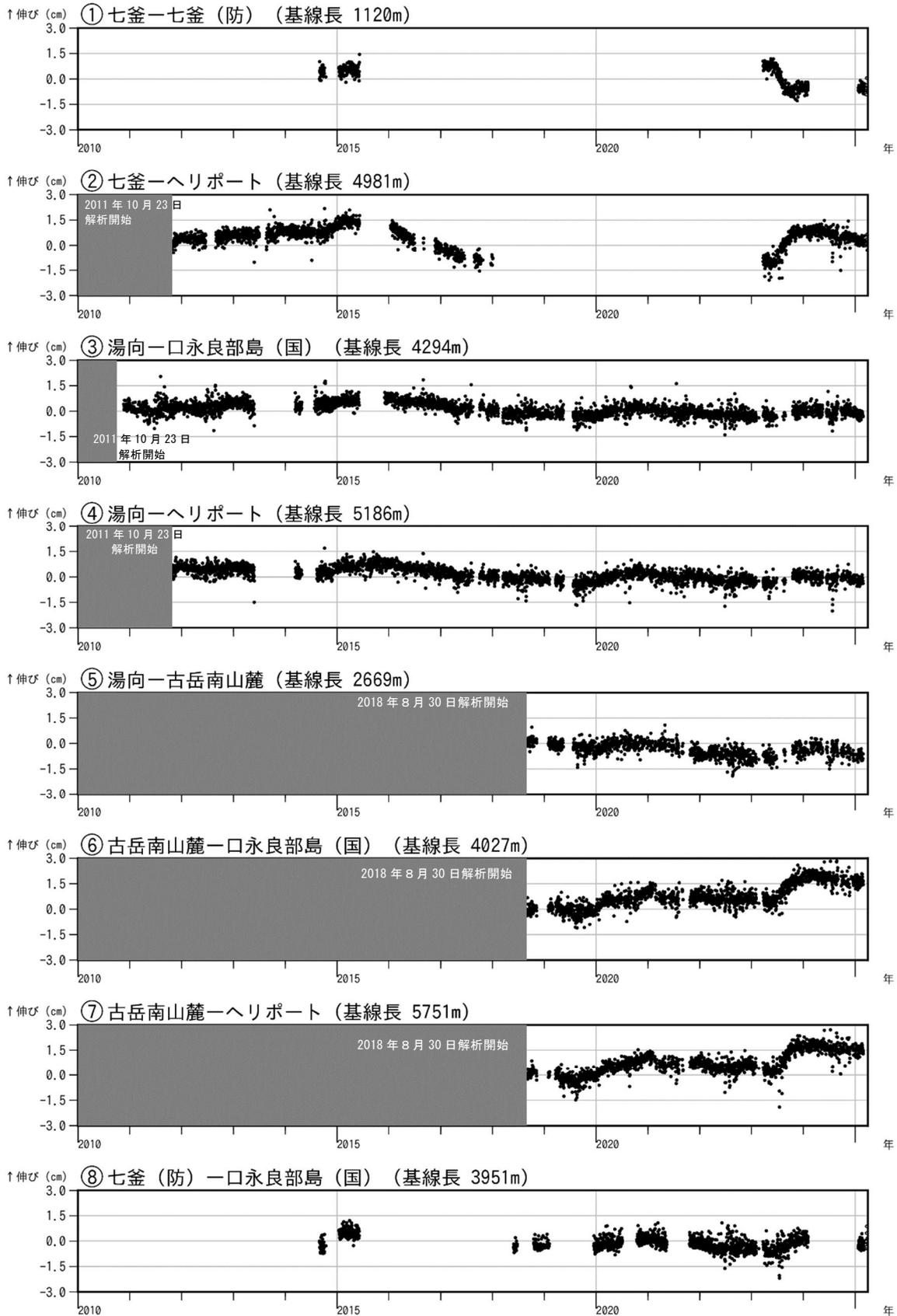


図 8-2 口永良部島 GNSS 連続観測による基線長変化（2010年1月～2025年3月）

これらの基線は図9の①～⑧に対応しています。

基線の空白部分は欠測を示しています。

2016年1月以降のデータについては、解析方法を変更しています。

2023年3月23日の観測点修繕工事（七釜観測点）に伴うステップを補正しています。

（国）：国土地理院、（防）：防災科学技術研究所

